

2020（令和2）年度
武蔵大学 FD 活動報告書

刊行にあたって

武蔵大学 学長 山崎 哲哉

2020年度は、一言で言えば「コロナに始まりコロナで終わった年」でした。授業を含めた大学運営に限れば「オンラインに始まりオンラインで終わった年」だとも言えます。

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)(以下、「新型コロナ」という。)の影響で授業開始が5月にもつれ込み、6月下旬まではごく一部の授業を除いて全面オンラインで授業が行われ、7月からは対面で実施しないと教育効果を得ることができない授業のみ一部対面授業を行いながら、後学期に対面授業を拡大する可能性を探りました。しかし、8月上旬まで感染拡大が続き、後学期も原則オンライン授業とせざるをえませんでした。後学期は全授業の1割強にあたる少人数授業(ゼミや実習・実技など)を対面で行うことができましたが、全体としてはやはりオンライン授業となりました。ほぼすべての教職員・学生にとって経験が無いなかでのオンライン授業に、皆が懸命に取り組み、試行錯誤を繰り返しつつも、なんとか1年間の授業を終えることができました。皆様のご努力、ご理解、ご協力に学長として心より感謝申し上げます。

さて、FD活動に関しても、FD研修会(全体会・分科会)だけでなく、FD委員会そのものもすべてオンラインで実施せざるを得ないという異例の一年でした。「ゼミの武蔵」の学びの集大成でもある「ゼミナール対抗研究発表大会」(経済学部)、「卒業論文報告会」(人文学部)、「シャカリキフェスティバル」(社会学部)も、オンライン開催となりました。今年度完成年度をむかえたグローバル・スタディー・コース(英語プログラム)の「Capstone Project Symposium」もオンライン開催となりました。しかし、個々の行事について振り返ってみると、ご父母の方がご覧になれるとか、遠隔地からの参加が可能であるとか、オンデマンドのものを後で見返すことができるとか、オンラインならではの成果も多々確認することができました。同様のことは、オンライン授業にも言え、8月と10月に実施した「オンライン授業に関するアンケート」の結果からもその功罪を読み取ることができます。概要については本文をご覧ください。

また、授業評価アンケートは、昨年度回収率が過半数を割ったことから(43.5%)、今年度に向けて様々な対策を検討してきましたが、結果的に授業がオンラインとなったため、対策そのものを実施できず、今年度も低い回収率となりました。オンライン授業であっても、過半数以上の回収率が見込める対策が必須です。

いずれにせよ、今年度の「オンライン体験」を生かして、負の部分を改善しつつ、正の部分をより伸ばしていく取り組みがFD活動にとっても不可欠であると考えます。

そしてなによりも、新型コロナが一日も早く終息することを祈念して報告書の巻頭言とさせていただきます。

2020 年度は、東京都に2度にわたって緊急事態宣言が発令されるなど 新型コロナの感染拡大防止を最優先の課題とする中で、本学も前学期と第1クォーター、第2クォーターが全面オンライン授業、後学期と第3クォーター、第4クォーターは一部の授業を除き、原則オンライン授業となり、急な移行に伴い混乱もありましたが、皆様のご協力により、無事、すべての授業日程を終えることができました。

FD 活動も、そのような環境下で行われ、また今年度の特殊事情を踏まえたものになりましたので、今年度の活動報告は新型コロナの感染拡大防止を受けて展開されたオンライン授業に関することと、それ以外のものに分けて報告したいと思います。

まず、前者についてから報告します。

第1に、毎年実施している「授業評価アンケート」については、今年度の特殊事情を反映してオンライン授業に関する設問項目を設けたこと、そしてセメスター科目の後学期およびクォーター科目の第3クォーターと第4クォーターについては一部の科目を対象に実施していたが、今年度からは全授業を対象に実施したことが今年度の新たな取り組みです。ただし、授業評価アンケートの他、オンライン授業に関するアンケートを2回実施したことなどにより、回答率は著しく低い結果に終わりました。

第2に、2020年8月と10月にオンライン授業に関するアンケートを実施しました。これは特定の授業に関するものではなく、オンラインで受講した授業全般にかかるものです。これらの結果については、一部の自由意見も含めて、全教員および学生に開示するとともに、内部質保証委員会の審議を経て、今後の対応策を学長名で大学公式ホームページにて発信するという結果につながっています。

第3に、今年度の FD 研修会は、オンラインで実施しました。2020年10月29日に、「オンライン授業のデザインと改善に向けて」というタイトルで、大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部の村上正行教授に講師を依頼し、全教職員を対象に実施しました。

第4に、今年度実施してきたアンケート調査を踏まえて、第6回 FD 委員会(2021年1月28日実施)で「オンライン授業に関する内部保証委員会への提言」をまとめました。

- (1) 授業課題については、学生に課題を課す際の大学全体としての方針を定め、各授業担当者へその方針に基づいた課題を課すよう学長より依頼することを検討いただきたいこと
- (2) 授業形態に合わせた授業実施については、2021年度もオンデマンド型授業を6時限に設置し、全授業を第1回から第5回までオンラインで行うこと(クォーター科目は第1クォーター全体)となったことを踏まえて、授業形態に合わせた授業実施について、引き続き検討いただきたいこと
- (3) 教員の ICT スキル不足を補うために、大学院生や学部生に対する教育的配慮も踏まえ、TA および SA の制度をより活用すること、教務部や情報システム部と連携し、オンデマンド型大人数授業用の FD 研修会の実施やマニュアルの作成等を検討いただきたいこと

この中で、2021年度に6時限に配置されるオンデマンド型授業、および第1回から第5回までの全授業をオンラインとすることに関しては、教務部や情報システム部と連携して、授業運営用ポータルサイトにマニュアルを掲載し、その案内文を2020年度内に教務部長と FD 委員長の連名で教員向けに通知しました。

次に、新型コロナの感染拡大防止を受けて展開されたオンライン授業に関すること以外の後者について

報告します。

第1には、今年度は、合計7回の FD 委員会を開催しましたが、対面による開催は一度も実施できませんでした。オンラインによるコミュニケーションにも次第に慣れてきましたが、不慣れなことによって、議論の内容等に質的な違いが生じた可能性は否めません。

第2には、「活動」報告ではありませんが、毎年実施してきた FD フォーラムを中止にせざるをなかったことです。このような状況ですので、対面での実施を避けたことは、ある意味、当然の方向性でした。オンラインによる開催もあり得ましたが、学生の声は先に述べた、今年度特別に実施した「オンライン授業に関するアンケート」または FD 活動とは独立したものですが、「オンラインご意見箱」などを通して、ある程度は把握できているということ、そしてオンライン対応で例年より授業運営や履修そのものに負荷が増大した教職員、学生のことを考慮しての判断です。来年度は、新型コロナも沈静化して実施できることを期待しています。

第3には、内部質保証委員会からの要請により、第3期認証評価に向けて FD 委員会として改善すべき事項への検討を行ったことです。その中の1つとして、FD 活動の基本的方針と課題の改正案の策定を行いました。従来のは、FD 委員会発足以来のものでしたので、現状に合わせた改定です。改定された FD 活動の基本的方針と課題については巻末資料をご覧ください。

第4には、第三次中期計画の施策としてポートフォリオの導入が定められています。ポートフォリオ導入に向け、カリキュラム・マトリックスで定めた DP と授業科目との関連がわかるようにシラバスのシステム改修を検討しています。大学としてポートフォリオの導入が決定された際は、ポートフォリオに必要となる項目について、FD 委員会にて検討することを確認しました。

第5には、来年度の予算案を FD 委員会として審議・決定し、また 2021 年度の事業計画については第三次中期計画で立てられた事項は完了もしくは経常事項へ移行することで、FD 委員会としては特に設けないこととしました。

最後に、FD 委員会の活動ではありませんが、本学の特色ある教育について、本報告書に掲載しています。一つはゼミナール活動を中心とした取り組みです。学部横断型課題解決プロジェクトは課題解決型の授業実践の事例であり、ゼミナール対抗研究発表大会、卒業論文報告会、シャカリキフェスティバルは、学部ごとにその特質を活かしつつ行っている学生の卒業研究発表の機会を提供しています。

もう一つは、三学部において、それぞれ特色のある演習科目の紹介です。昨年度までは、グローバル化に対応する教育に絞って紹介していたところですが、今年度は、グローバル化に限定せずに、各学部の FD 委員の先生方に選出をお任せしました。

以上、簡単ではありますが、2020 年度の FD 委員会としての主な活動を報告させていただきました。また、本報告書の最後には、会議記録、関連する事業報告書などを掲載しました。これらの記録を通じて本年度の本学の FD 活動の状況を理解していただくことができれば幸いです。